

『平成30年』という歴史的年度のスタートにあたり。

慣れ親しんだ『平成』という年号が、いよいよ残り1年と4カ月になりました。

『平成』という年号が、1年間、12カ月あるのは、今年が最後の年です。

次の年号は、まだ、未定ですが、一つの時代が終わることは間違いありません。

経営を任された者にとって、「平成30年」、あるいは「30年間」には、いろいろな深い意味が詰まっています。

例えば、「企業30年説」があります。夢を持って創業し、夢中で走り抜けて来ても30年が、一つの限界として、多くの企業は消滅の運命にあるというのです。

「世代交代も30年」が、一つの目安です。30代で創業した社長も、60代になり、次世代への交代のタイミングの時期に入ります。

「社風構築に30年」と言います。損益計算書は1年間の成績ですが、貸借対照表を良くするには10年を要します。更に、よい社風を構築するには、綿々とした努力を30年続ける覚悟を要するというのです。100年企業、200年企業は、「代々初代」という変革の勇氣と、伝統・歴史・家訓を守る心構えの相反するものを高いレベルでバランスを取る必要があります。

私も、昭和60年2月に33歳で開業させていただき、今年で満33年、66歳になります。ほぼ「平成の年号」と共に経営の第一線を生きて来ました。感慨深いものがあります。越し方を振り返り、これから行く先を観るのに、これほど、大きな「区切り」のチャンスはありません。

社長、平成30年を、今までの全人生の『総まとめ』の年にしましょう。

今上陛下のお言葉の中に「常により良い日本をつくる努力を続けることが、私どもに課された義務であり、後に来る時代への責任である」と述べておられます。

一企業には、「経営理念」があります。それぞれが、それぞれに努力し、頑張っています。これらの全企業の集約された方向性、あるいは日本の企業の目指すべき『北斗七星』が、上記の今上陛下のお言葉であり、これ以上のものではありません。

経営理念の更に上位概念が、「より良い日本をつくること」なのです。

平成30年は、“年号が変わる”“30年のスパンで考える”、又と無いチャンスです。

目の前の、我社の利益を超えて、日本の将来や、子供たち・孫たちの幸せを考える機会でもあります。お互い、社長という責任ある立場にあるだけに、我社の発展は基より、業界の発展・日本の中小企業の発展、そして日本の発展に心を砕いて参りましょう。これが次世代に伝えるべき、経営姿勢の神髄だと存じます。



今月のポイント

トップリーダーこそ

超長期での構想を。